



高田大経 印
五

^ 5
5594



門へ5
5594
巻



霜古呂乞集

手次方と海ひむつとありて今片
門人最支とまゝかゝるる者ありて

新上とてふる言けりやありて

鳳朗

半くゆりての夢は成るるや

掉最支

湊長更

かゝるる枯果はとて庭の字

如息

野庭はうて

河へて雲の寄まゆる水は
 逸洲
 舟も招かざるよ此の川も
 竹煙
 云の影に記をさしゆく神
 柴燈
 影もやそはるる水も流るる
 永久
 燈の光えりやそはるる
 素明

追悼

ことなき家の跡に朽とるる水は
 蝶六
 舟も梅もまざるよ此の川も
 万丈

カサヤの跡の初日の穂ち
 芦滴
 舟も雲も朽とるる水は
 萬里
 朽とるる水もそはるる水は
 柳巴女
 舟も雲も朽とるる水は
 和尋女
 舟も雲も朽とるる水は
 金星
 舟も雲も朽とるる水は
 遅流

舟も雲も朽とるる水は
 舟も雲も朽とるる水は
 舟も雲も朽とるる水は

茅枯くそ后流うむ子とわく
山好く花うおるるきぬうは柳
鳥吟

まゆうす降露といふ中

高折道の木の青より暮多き梅もや エナコ 荳村

歩くそ空くそ花の枯くそ音 松窩

鐘の音もくそくそくそとけり小 瑛存

手向くやんすうきくそ アツミ 鳴宮

菅追善

俳諧之連歌

晨支佛

紫陽花や夕日の色くす海くそせき

柳白ゆく風流くそる花より 呂叟

ふら酒味曾五橋之橋掛くそくそ 西馬

吹すくそ葉よりそえぬ小柄柳 永久

常盤の月の今宵の光くそくそ 雀翁

撥く程くハあうまくそくそ 万里

中々社と家とくくふき深打場 茶遊

多可々乳とるちとるく 氷由

狗束の浅草ちの四時々時々 圃二

猪子一皮けい水々四練 十荷

唾の子の何や々舌と刺る何は色 万丈

胃抄い上蘇 鏡の信 蝶六

道々々々々押える音は身 風外

流る里と家のおううひえ後々 琴の女

河射山の家り小登り名出来々 天馬

さけい々々昔々時時々々々 百和

横笛のふり上あきん々々々の喧 四山

春のそと川面ささや降々 橋水

十ヲ
か代々下船の身々々時々々々々 乙雄

風呂湯塩のまき子一枚 鳳棲

糸役古和紙と万ちうふ々 糸葉

法書列々々々時々々々々 茶静

夕暮の心ゆくも空の晴る別り 後臺
 ちくちくもふの跡の沼 粟 月窓
 とけきのあつても厄の今 糸 逸測
 舞の形を同じくするものありや 台く
 雲はと見えし川うらふとゆき 真奇
 静かたさうそ花枝をさくむ 蝶翁
 自らうけ角力けしつる小色え 如息
 葉はゆきましくまき ち 樹年

大切を礎石とせし片修く牙 宝三
 世る小純とくゆきの葉整 坎巢
 招きよきと海すけの路 吟 成鳥
 橋く大とくも林の小 幟 洒一
 去りしとゆきとけく白心也 鳳朗
 篠々空のうらうらか 芝 從筋

各拾香

香の味を自らの心で感じし
 香の味を自らの心で感じし

諸邦自他四時混雜

空しくい息をうきを 山口 梅室

空やけや美根を 鴨 杜寥

雪や本の方を 白 岱年

晴る程を一日さわく 鹿 杜驚

うき程を 有 有節

人きく 九 九起

梅の 凌 凌雲

ゆきや 文 文翠

晴る 岳 岳鳳

左 淡 淡叟

大 其 其山

万 白 白鷗

折 門 門左

雪 林 林曹

押 冬 冬波

春の情を引く子守や 春 暮 紙 白
 蕙少く成てゆくふを梅見ぞ 晋 丈
 道業の上や 旭のおもひこゝろ 六 應 吏
 無くはる虫ちよのつく 宿 也 太 奉
 春まけに水と春を引く 露 泉
 秋空の露と引くや 露 泉 米 雪
 春あけに 何となくと白ひり 風 棲
 水影のまきや 七 年 の 春 の 末 芳 節

細粒を飾るのまき 引く 春 暮 粟 粟
 先づ 松の明く 田中 の 夜 ぞ 松 丈
 女とを男むまひや 把 粽 山 月
 万金のや 春の 明く 宿 の 浅 蘿 彦
 見おそく 春の 明く 宿 の 浅 有 向
 遠山の 春の 明く 宿 の 浅 曜 潤 サマキ
 乙女や 春の 明く 宿 の 浅 茂 推
 何となく 春の 明く 宿 の 浅 今 是

葎の古きむや何らありし 俗 ^{イヨ} 常居
 蓮華千がくの世に 常 葉 映門
 植込るや木の根に 乃昔の石 菊圃女
 吹くそわやうり 磯千石の石 柴人
 空よりあそびく と宙のむえぞ 岳推
 五りもや花うけの 中あひ 卯角
 花上人お人 替りや 一十日 ^{トサ} 草唯
 吹くそわく ち 驚くは 石 ^{キイ} 閑那

うねのちの 休の 戦きし 刻きり ^{ヒセン} 布國
 明あき 招の 言 深く 素 細 涼呼
 朝ふや 登の 糸と 何れ 角と あり 蕙風
 歩く 所を 家 家と なる 寸 半峰
 月を かく 招ニ 夕 本や 夕月 招 北年
 起り 中を 睡 ぬる 糸く や 糸の 月 ^{タニハ} 九花
 人の 日や 娘く さま けり 遠 あり ^{イナハ} 寸風
 不子 ち 娘く 鳴く ち 娘く ち せ 凡 佛兄

葉のふり夜々日紅言白ひびき
 宇逸
 多梅あふ常流けりて川 流 洞天
 藤すまじりや雲系と下ふくわ 雨 堂
 夏草と下はふくくや山の身 ^{サマ} 馬 垆
 きりもくたのあふくく梅のまじりや 山 骨
 空割と流を水と氷り多流 ^{アツ} 砺 山
 手と持て名と書をけり雪まらぬ 玉 脂
 髪とふきと葱包んくぬきぐ 楓 下

名をいふるひびきや葉のふ 虚 白
 名をいふるひびきや葉のふ 芦 一
 夏草と下はふくくや山の身 ^{サマ} 岸 舍
 きりもくたのあふくく梅のまじりや 花 朴
 空割と流を水と氷り多流 ^{アツ} 荻 青
 手と持て名と書をけり雪まらぬ 釣 江
 髪とふきと葱包んくぬきぐ 相 一
 名をいふるひびきや葉のふ 夜 白

何と明て空の遠くや 巾 雲石
 鐘招や 岳乃小家千泊る客 雀叟
 此日わし舟と鐘乞や 始 洪石
 遠くまゝ一面うらゝ 梅眠
 春へあけぬ 始きま 且もや 葉の標 一 幽
 光日とまや 永き日の流りや 杜 衡
 只存れを手に 移魔工 別る月 流 芳
 初泊りて 時白の 葉 依 岐 蝶

音のうら水を なるなる 吾 方 汀
 明く 招のりつと 鳴くや 不のうら ラハリ 而 后
 小堤や 舟千 明くまゝ 乃 我 竟
 とくうまゝ ありや 招客の 始 標 黄 山
 一本とくまゝ 日 暮るまゝ 乃 エシヤ 且 松
 接くまゝ 右 連りくや 始 スルカ 連 巴
 暮るまゝ 舟 始 合や 暮の 月 碧 山
 夕暮や 舟 始 合や 暮の 月 栖

三かたのり日と生れしや海り香
 有鱗
 名日や藤の宮つゝ不栴の常
 番々
 今上来る浦近のくぬぎさうり
 密雀
 藤のさくしすまのくくさる初馬
 仙菜
 冬さけあさる涼く家の内
 雲想
 翁一重名をくくゆや初く丸
 連山
 流是してあさるくさるく居の巻
 見路
 ちか流もあさるくさるくやうく城主 サカミ
 立字

水仙や霧いと吹く初る里
 榎堂
 春のささくくさるくさるく
 一猪
 結るるとるくと無流む流う家
 達美
 夕去や近りけくさるくさるく
 氣條
 月千句くさるくさるくさるく水
 対笠
 手前のいさるくとあさるくさるく
 花水
 春さくむ流あさるくや坊泊
 鞠車
 ちか流もあさるくさるくさるく
 花山

明く月と花と影と影と中 時 多
詠人の巻人よ別々や大板曳
何ぞつくろふ葉をさく草つ茂く
面やうろくく春風くは春風く
川並の葉をくく春のわくちく
明くまは春の影くはまうく
かきくくくくくくくくくく
影くくくくくくくくくく

鱗角
兔角
露亭
花陰
和水
丹堂
白岭
宣頂

花うろくくくくくくくくく
一葉くくくくくくくくく
春風くくくくくくくくく
遊りくくくくくくくくく
春くくくくくくくくく
葉のくくくくくくくく
影くくくくくくくくく
春本様白くくくくく

蘼水
飲山
白羽
槐堂
呉丁
蘭砂
蕙岱
極ふ

落の紫の白すりやうやうやう 如く

初月の夜本うくはななうりうり ムサシ 月旋

休すつきあふとをうり坪の内 五渡

春さくはなきりねと春の月 南く

庭さうやうたふや月の大木出 寄三

梅叶明くふの春さくはなうり 栝青

二三夜さくはなさくはなさくはなうり 玉芝

さうやうやうやうやうやうやう 再青

望日の日々やうやうやうやう 千瑞

うさむしやうやうやうやうやう 竹山

川流とまの梅のさくはなうり 杉曉

抱くさうやうやうやうやう 涼松

是れははなをさくはなうり 氷佳

塔はなうりうりうりうり 月賀

春のさくはなうりうりうり 太極表

まのさくはなうりうりうり 上丹 音人

あゝ唯まの身をくちりちり散らす下サ 花の女

親と子と昔はあひうら孫の島 蕉月

よく名はる一羽成りきり子 仁里

不慮やけりけりきり子の海 里江

うらむ影をあらう起る陸 之桂

橋板けりきりきりきりきり 賣痴

何れやう冠けりきりきり 新く

山吹や常落しきり白 西湖

泣泣や砂とちりきりきり 幻芝

あゝの原をけり上るゆき 野菓 ヒメナ

所伝所の懐けり白し 阿 ツク

揺る身しりけり子の日の常 舍用

新記をあらう手持おし 心阿

此の言をあらうけりきり 佛孫

揺る身しりけりきり 御風 ナ

あゝ日のうらうらき 國彦



有るは空のさうや明の去
 由之
 昔の初音さうりゆとそくやりぬ
 化鵬
 初是はく美のゆきすきや 子
 茶山
 曲く初提てく美の明中
 北洋
 晴音のさく初定り枯くしり
 菟村
 望場くさくあけくか柳う仰
 悠真
 宙空の空りけり明の去
 茂珠
 とそくく毎日山りかきふが
 大直

又通にや空の事はるさく
 苧琴
 巾の上帯音まじりけり
 吉奇
 子とあしあき初より初め
 瑛奇
 うらひるは初音や耳のあそむき
 梅亭
 鳥のたうくかき初めあき宿や
 羅奇
 あふ初音影のあは初め
 姫山
 重くさく初音くさく水鏡の
 素紋
 福さくあさくあつ初めあは し
 白奇

招のまゝ、初きりとも終 芭 月外
 其のあしと指さる手 鞠 中節
 樹のりやひたして 涼しうかろう 敬奇
 ふうやきうあゝや 梅りつ 常 明花
 産むまゝもくろく 折る 鶴のりや 周睦
 象あゝそまのう 角力 咄 鶴村
 ぬりくも 砂語 是の 極 久 久
 切をくも 帯くも 晴を 山の 音 椿嶺

みるあのとつらつら 月 圭布
 新々かく 瘡もくもく 月 葛古
 其くもくもくもくもく 月 少年 茶外
 意わきく 二言 森より 鹿の 柵 若人
 うらうら 山 旭のうら 温 温惠
 遠山と 湖と 中と 終 四 月 湘王
 うらやうら 山と 湖と 中と 終 東慶
 降るも 飛者も ちかあゝ 悠平

竹壺
 柳壺
 呂鳳
 嵐外
 可轉
 雲里
 道等
 欽哉
 竹煙

言斗
 雷村
 松蔭
 白雅
 一多
 嵐有
 得

狀

約きのあつとまのくちや翠の月下 音風

ふ山中と見せり方又かゝ猫の意 喜緑

双ふ山と見せり方又かゝ猫の意 静菴

城壁や酒の泡の山登り 貞直

淡雪巾一寸階行々おろし 四山

蓬草又まゝまきかやふ日 如息

抱く子の手厚き所り新音齋 春雀

此流を汲く信々梅の世 錦枝女

おろきくんの逢ふ様 梅漢女

象の首をくちせん 一具

新よおろき子と淋くちや 碓嶺

八海の遠歩もやまかき 護物

是又旅情を懐く年のは 由誓

白と吾をくちありり時 得装

おろきくち山に白のゆり 見外

活計梅と家鴨の羽く踏まぐ
 柿の子の料理名うねと馳走ぐ
 夕の影と日いさく松と美の梅
 東の海と水浪とわさね暑うお
 備折や舟と家のはなと苗ち
 夢と中と老とむいせし 柳 掃 除
 海と指さるうちと舟とあよりり
 灯火の滅く苗と暮く 鳴 舌 鈴
 謝堂 松什 山外 梅笠 惟州 遅流 流芝 魯心

時を時やとくく 響く 業
 里んと舟と波とく飛ねむく歌を
 鏡松とくしと暮とわや山と流ら
 崎山や浪より白きう矢のふ
 人う流物く 舟と舟とくうとる
 帆柱の影とあしとくは海苔とや
 なが中と夕空とえきとく五月と苗
 燈火や鏡浪と火の子とけり止り
 為山 卓郎 又く 榴塙 采山 助宣 伯遠 荷少

梅香や葉染法不垣の白戸 秋香
 立河うる鶴やうううう月の三原 淡吉
 雪や雪と算る相根つうひ 羽人
 月うらむを春の清くうううううう 外息
 花の葉え破く日々おまきり 釜吏
 けしとくは息まきうううううううう 二柙
 けしとくは息まきうううううううう 風外

けしとくは息まきうううううううう 逸淵
 初給るうううううううううううう 雨籟
 大さううううううううううううう 圃二
 本のううううううううううううう 台く
 雪松葉を雪のふくうううううう 雀翁
 ううううううううううううううう 後臺
 登原とるううううううううううう 樹年
 とつとつとつとつとつとつとつとつ 茶靜

長江の舟中 遠方の浪系ぞ
 真奇
 謝神の舟中 舟のつらぬ舟招ぞ
 成鳧
 鴨子の一番 舟や出入 医者
 永久
 白松の舟中 舟のつらぬ舟招ぞ
 百和
 水鏡の舟中 舟のつらぬ舟招ぞ
 此扇
 舟と舟の舟中 舟のつらぬ舟招ぞ
 荻守
 持山と舟中 舟のつらぬ舟招ぞ
 柴遊
 舟と舟の舟中 舟のつらぬ舟招ぞ
 柳巴女

舟中 舟のつらぬ舟招ぞ
 乙雄
 涼く 舟のつらぬ舟招ぞ
 羅梅
 水鏡の舟中 舟のつらぬ舟招ぞ
 沢井
 舟と舟の舟中 舟のつらぬ舟招ぞ
 和哥女
 舟と舟の舟中 舟のつらぬ舟招ぞ
 機外
 舟と舟の舟中 舟のつらぬ舟招ぞ
 菅巢
 舟と舟の舟中 舟のつらぬ舟招ぞ
 三和
 舟と舟の舟中 舟のつらぬ舟招ぞ
 蝶翁

新月や掃ハ引んほとあつ塔り	良台
夏もつり日暮るハかゝ松尾奈	角羽
乙女の茶と舟と舟とが家さ	馬朝
湯上りのゆき梅の白ひさ	逸山
菊の本の香とと引く物玉りる	月窓
清くけそと細子のまの夢忘れり	鳥吟
左や小舟鳴り上りて懐うか	船笠
初冬風や枯葉沙る垣の空	壺天

片と鳴くもる方又あり初時句	震栗女
清くけそと細子のまの夢忘れり	雪之
初や〜と風の吹さくお掃うか	橋水
足音と舟と伸るや春の子	千荷
万葉の歌つら子のなつりりや	天馬
古川馬起つたのまや海の上	渚邑
茶室つるまゝと松と春籠り	卓阿
月下心来く城垣の周りなり	室三

鐘の音は初より終の永きや
 吹く風は月の蒼きや合歓のふ
 鳴るや世と水の上下の憂のふ
 立降るや雲はるや初秋の音
 結露と雨と風と水と初秋の音
 獲立しやうらなげ子の鳴るや
 けしきと雲と鳥と木と初秋の音
 竹と籬と土と石と初秋の音
 酒一
 若海
 寄春女
 徳丸
 月あふ
 史未
 英又丸
 坎巢

木下書心松く歩く是えりり
 杉居
 登空の鳥くくくくくく
 柗枝
 持く草く草のくくく二つく
 亀丸
 橋のくくくくくくくく
 蟹茂
 春のくくくくくくくく
 愛次郎
 あくくくくくくくくくく
 鳳朗
 中くくくくくくくくくく

五季の秋...
五季の秋...
五季の秋...

菴中

不... 西馬

水... 徒筋

新...
新...
新...

集者

あ... 呂叟

晨支...
晨支...
晨支...

文庫...
文庫...
文庫...

晨支

懈... 露泉

吹... 風朗

瓜... 應吏

と... 風棲

と... 葉葉

足... 葉葉

之揚の干うぬる幕よ長句の来く、
太拳

木の抱屑の梅くハおれ、
万像

望く山は法華七里ハ不世界、
躍測

露と石とましく眉ハおれさげ、
木長

浪翻く流くハくさるる又反古、
潮谷

あく霧の度く自、
布国

河原く赤鶴路の松赤き、
北年

葉の赤くくくは花痕跡、
涼呼

猿高り骨格の跡くハ、
白鷗

塘の際ましくくハあけなま、
杜鰲

長蛇居凡くハくはくはくは、
梅室

花合纏くハくはくはくは、
蘿炭

名高くハくはくはくはくは、
鼎丸

海井くハくはくはくはくは、
晋夫

朝虹のつハくはくはくは、
淡叟

鶴の羽砂のくハくは、
其山

蕨にそくあり性根の平家 アフリ 楓下

家々焼くそ イカ 希色

曇しき路にそくと押包そ、 晴秋

見せるとすれと見えぬ香路場、 双影

松笠を握るやいおや止ひ イセ田市 杜蘅

そがの草よあらしは結露、 一呼

あまふあふあて月をそとる智恵、 却波雄

晴を蕨の造くゆり、 流芳

^十海山とそくあり海を秋の色、 探奇

月の明多そとあそき酒庄、 霞汀

物見とそくありそとあり ヲハリ 黄山

面印と音のよき音にち サカミ 丹堂

印とそくありそとあり サカミ 呂叟

本の紫清とそくあり伸るそそ 永久

るるすていんそくありそとあり サカミ 万像

春の影跡と眺りの日の月 潮谷

重なるうさぎや 法村の露の文 探奇

静さや 朽く 露の落る 音 却波雄

葉の自由をうりまへせうらうら 一呼

切雲の乃乃をへくくく 霞汀

雪はあいらひく 狂言の巻や ^{エト} 竹堂

い〜

ある春のい〜と 山成る 塊貝

花より自然の 養生也 法州の春河子

神中事より年あり 春 淡路浮野原

源系君子の 顔風より 留力 是を 春を

他を好む 春を 留力 彼の 向ふ 春を

春を好む 留力 春を 留力 彼の 向ふ 春を

春の 留力 留力 留力

二階殿下 留力 留力 留力 留力 留力

晴わ初冬病床に没す所の無何何の程を結
わく既の家の志のつるあり自他の家名を
懐もふ心見方とありて又の同様の程を
手紙の流しも乃て以て於録名と共集りてあり
著しき信りて支那の異名を号りて尚也

三傳十年甲辰初冬

藤村危呂史

早稲田大学図書館

011088404272